

## 4. 刊行物、主催会議等

気象研究所の研究成果は、気象庁の業務に活用されるほか、研究所の刊行物、研究成果発表会などを通じて社会に還元している。

また、関連する学会や学会誌などで発表することにより、科学技術の発展に貢献している。

### 4. 1. 刊行物

#### 気象研究所研究報告 (Papers in Meteorology and Geophysics)

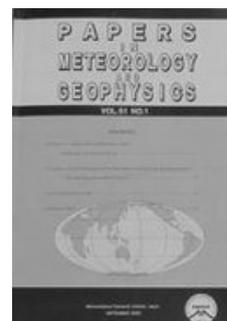
研究成果の学術的な公表を目的とした論文誌 (ISSN 0031-126X)。

気象研究所職員及びその共同研究者による原著論文、短報及び総論 (レビュー) を掲載している。平成 17 年度からは、独立行政法人科学技術振興機構が運営する科学技術情報発信・流通総合システム” J-STAGE” に登録し、オンライン発行とした。

J-STAGE URL: <https://www.jstage.jst.go.jp/browse/mripapers>

なお、第 65 巻をもって冊子での発行は終了し、オンライン発行のみとなった。

令和 2 年度は次の論文を掲載した。



#### 第 68 巻

- ・ 北畠尚子, 津口裕茂: 2016 年 8 月末の日本海の低気圧の発達と時間発展: 中緯度の流れと台風 1610 号 (Lionrock) の相互作用

#### 第 69 巻

- ・ 小林昭夫: GNSS による長期的スロースリップ客観検出手法の応用—短期的スロースリップの検出と長期的スロースリップの規模推定—

#### 気象研究所技術報告 (Technical Reports of the Meteorological Research Institute)

研究を行うなかで開発された実験方法や観測手法などの技術的内容や研究の結果として得られた資料などを著作物としてまとめることを目的とした刊行物 (ISSN 0386-4049)。気象研究所ホームページで閲覧することができる。

URL: [https://www.mri-jma.go.jp/Publish/Technical/index\\_jp.html](https://www.mri-jma.go.jp/Publish/Technical/index_jp.html)

なお、第 72 号をもって冊子での発行は終了し、オンライン発行のみとなった。

令和 2 年度は第 84 号を発刊した。



#### 第 84 号「気象庁移流拡散モデル設計書」

(新堀敏基, 石井憲介)

### 4. 2. 発表会・主催会議等

#### 気象研究所研究成果発表会

気象研究所の研究成果を広く一般に紹介し、社会的評価を高めることを目的とした発表会で毎年 1 回

開催している。令和2年度は、新型コロナウイルス感染症対策として、令和2年12月16日から令和3年1月27日まで、気象研究所ホームページに以下の報告題目動画を掲載し、オンライン開催した。

**【報告題目】**

- ・北極域の急速な温暖化  
報告者：庭野匡思（気象予報研究部 主任研究官）
- ・令和2年7月豪雨の特徴  
ー球磨川流域に記録的大雨をもたらした線状降水帯の構造と発生過程ー  
報告者：益子 渉（台風・災害気象研究部 室長）
- ・集中豪雨予測のための水蒸気ライダーの開発  
報告者：酒井 哲（気象観測研究部 主任研究官）
- ・スーパーコンピュータ「富岳」を用いた豪雨や洪水の予測に向けて  
報告者：川畑拓矢（気象観測研究部 室長）
- ・津波の即時予測技術の発展 ー東日本大震災から10年ー  
報告者：対馬弘晃（地震津波研究部 主任研究官）

**第2回環境研究機関連絡会研究交流セミナー**

気象研究所を含む13の環境研究に携わる国立試験研究機関、国立大学法人及び国立研究開発法人が参加する「環境研究機関連絡会」が主催する研究交流セミナー（平成15年度～平成30年度までは環境研究シンポジウムを実施）で、参加する研究機関が成果の発表を行っている。令和2年度は、新型コロナウイルス感染症対策として、12月25日（金）にWebセミナーが開催され、気象研究所は以下の発表を行った。

**【口頭発表】**

口頭発表テーマ：「今ホットな気候変動影響・適応関連研究」

発表名：適応策策定に資する日本域の温暖化予測

発表者：野坂真也（応用気象研究部 研究官）

**【総合討論】**

総合討論テーマ：「科学的知見を適応施策にどのように活かすか～社会との連携～」

話題提供：適応施策に活用可能な気候予測データセットに関する話題提供

発表者：村田昭彦（応用気象研究部 室長）